

不妊症に対する高校生と大学生の意識調査

岡山大学医学部保健学科，岡山大学大学院保健学研究科*
小寺菜見子，大田有貴子，塩田萌，中塚幹也*

[目的]

現在，日本の10組に1人の夫婦が不妊症であると言われている．この不妊症の原因の中には，思春期に発生しているものもある．また，結婚後も，あまり不妊症自体を身近なものと感じないまま，不妊症を意識したころには高齢となっている場合もある．

このような現状を考えると，高校生や大学生が，不妊症，あるいは子供を持つこと自体に対して，正しい認識を持っていることは重要であると考えられるが，その実態は知られていない．そこで今回，高校生や大学生を対象に「不妊症に対する意識」に関して，調査を行った．

[方法]

岡山県内の高等学校1校，および，大学2校の学生931名を同意のもと，対象とした．対象の内訳は，高校生521名，大学生407名，また，男性247名，女性600名であった．無記名の自己記入式質問調査を行い，回収は，回収箱を設け投函してもらった．尚，本研究は，岡山大学大学院保健学研究科倫理委員会の承認のもと施行した．

[成績]

1. 不妊症に関する意識

「不妊症という状態があることを知っているか」という質問に関しては，97.9%とほとんどが知っていた．「自分が不妊症であれば子どもをあきらめるか」に対しては，74.6%が「あきらめない」と回答したが，代理出産や死後生殖を利用しても子どもを持ちたいと回答した学生は各50.5%，54.2%であった．

高校生と大学生とを比較すると，「将来，自分が不妊症になる可能性があると思う」との回答は，高校生が75.8%，大学生が91.1%であり，高校生で有意に低率であった．「不妊症の人は何か大きな病気をしたためだと思う」との回答は，高校生が17.3%，大学生が10.3%であった．

また，男女間で比較すると，「将来，自分が不妊症になる可能性があると思う」との回答は，男性が59.8%，女性が90.6%であり，男性では，女性に比較して有意に低率であった

2. 不妊症につながる原因の認識

不妊症につながる可能性のある原因として、「性感染症にかかること」を選択した学生は 72.1%であった。また、「何をしても大丈夫」と回答した学生は 8.7%であった。

高校生と大学生とを比較すると、「性感染症にかかること」を選択した高校生は 59.7%、大学生は 88.1%であった。また、「多くの性的パートナーをもつこと」を選択した高校生は 32.3%、大学生は 59.1%であり、いずれも高校生では、大学生に比較して有意に認識が低かった。

また、男女間で比較すると、「性感染症にかかること」を選択した比率には有意な差は見られなかったが、「妊娠中絶を行うこと」（女性 78.6%、男性 67.2%）や「極端なダイエット」（女性 72.5%、男性 59.5%）が不妊の原因となる可能性があるとした比率は女性の方が高かった。

3. 「何をしても大丈夫」と思う学生の背景

「赤ちゃんを抱いたことがない」と答えた学生の方が、「抱いたことのある」学生よりも「何をしても大丈夫」と回答している比率が高かった。「携帯がないと生きていけない」、「家族とはあまり仲良くないと思う」と回答した学生の方が、そうではない学生に比較して、「何をしても大丈夫」と回答している比率が高かった。

[考察]

今回の結果からは、高校生の性教育の実施率は高いが、将来の不妊症に関する情報までは得られていないと考えられる。

不妊症に対する意識において、全体的に不妊症の認知度は高く、またほとんどの人に妊娠するのは簡単ではないという認識があることが分かった。「将来自分が不妊症であっても子どもをあきらめない」と回答した人が 4 分の 3 であるのに対し、一般的な不妊治療以外の「代理出産」や「死後生殖」をしてでも子どもを持ちたいかを尋ねると、「はい」と回答した人は半数に留まる結果となった。ここで不妊症に対する意識を高校生と大学生で比較すると、高校生の方が不妊症を現状のものとして捉えられていないということが分かった。さらに男女間で比較すると、女性の方が男性より「将来不妊症になる可能性」を強く感じていることが分かった。